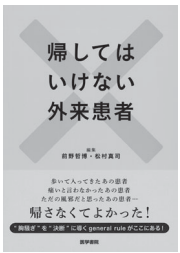
書評

[評者]
井村　洋
飯塚病院総合診療科部長



帰してはいけない外来患者

前野哲博，松村真司 編

A5判　頁228　2012年
定価3,990円(本体3,800円＋税5%)
[ISBN978-4-260-01494-6]医学書院刊

外来診療トレーニングにとって，最良の参考書が出た．一般外来向けに作られているが，ERでも応用できる．いずれの現場でも，「“帰してはいけない患者”を帰してしまう危険性をはらんでいる」からである．その危険性を下げるためには，外来診療においても，病棟診療と同様に，反復学習と教育的介入の機会が必要となる．このことを本書は強調し，それを求める学習者に向けて作成されている．

「帰してはいけない患者を帰さない」ことは，外来診療のすべてではない．「帰してはいけない患者であっても危険を最小限に抑えて帰す」ことや，「帰してもいい患者にもしっかりケアする」こともある．それでも，あえて本書が強調していることは，十分に外来診療の教育を受ける機会がない学習者にとっては，「帰してはいけない患者」を見逃さない技能の獲得が，患者にとっても医師にとっても最優先されるということである(異議なし！)．その技能支援のため，本書は生み出された．

全3章からなっており，第1章では，外来で使えるgeneral ruleが提示されている．外来における判断・決断の“オペレーションシステム”が，わかりやすくシンプルに提示されている．長年の外来教育から，編み出された方法が示されているのであろう．説得力満点かつ必要十分．「“胸騒ぎ”を“決断”に導くgeneral rule」と，本書の腰帯に詠われているとおりである．この30ページ分の内容を繰り返し伝えるだけでも，明日からできる指導医になれそうだ(私はそうする)．

第2章では，初期研修の経験目標と同様の27症候についての，「見逃してはいけない疾患」「見分け方」「安心なサイン」「general rule」が述べられている．いずれも，見開き2ページに収まっている．フォーマットが一定しており，字数も限られているので，診療中でも確認が可能である．もしも，症状から見逃してはいけない疾患が思い付かなくても，患者の前で当該の箇所を開いて，「あなたの症状からは，これらが見逃してはいけない疾患です．そして……」と説明を続ければ，説得力アップにつながるかもしれない．問診票があれば，主訴を見た直後に，見逃してはいけない疾患だけをチラ見した後で診療に臨めば，帰してはいけない患者を帰すリスクを下げることにつながろう．指導医はチラ見をして「この主訴から帰してはいけない疾患は？」と問いかけることにも使える(2人ともチラ見したら，どうなるのって？　それはそれで，より深い議論が始まるのでは……)．

第3章では，31の見逃し症例の事例についての解説が提示されている．「非典型的なくも膜下出血の症状」「明らかにショックバイタルなのに看過してしまう」など，読みながら痛い経験を思い出すものばかりである．各々のケースについて数個のTIPS(教訓)がついており，独学をしていても，まるで指導医がいるかのように，思考・決断に際する知恵を授けてもらえる．

本書は，医学生からベテラン開業医まですべての医師に，目を通していただく価値がある．一般外来やER看護師の学習にも有用である．私は，医学生や初期研修医に対して，総合医の中核技能の説明に使用する．「本書の内容ができるようになれば，総合医技能の一つは研修修了です」と．

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2012